

風天俳句と滑稽

小林英昭

いま、手元に、「風天・渥美清のうた」森英介著という冊子がある。風天とは御存じ、「男はつらいよ」の、あの車寅次郎の「風天の寅」からとった俳号である。この渥美風天句をお借りして、滑稽とは、滑稽俳句とは、について少しく考えて見たい。さて、まずは、初期の頃の句から三句引いてみる。

おふくる見にきてるピリになりたくない白い靴

むきあって同じ茶すするポリと不良

ステテコ女物サンダルのひとパチンコよく入る

風天の遺した約二百十句の中から、まず選んだこの三句。五七五の定型無視、さらに、季語なんてどこ吹く風の、寅さんの役どころそのまま自由奔放である。でも、不思議とリズム感はある。あの的屋寅さんの見事な七五調の啖呵売の科白を思わせる。しかしここで言いたいのは、名役者としての渥美の確かな人間観察眼である。しかも、すでに初期の句にそれが見え隠れしていることである。渥美は、俳句それも句会が好きだったという。撮影でどんなに忙しくても大船からタクシーで句席へ駆けつけたという。演ずるは詠ずる。喜劇役者としての渥美は、人間を「滑稽な生き物」と捉え、演じていた節がある。「男はつらいよ」でもしかり、滑稽を演じ、大いに観客を楽しませたのである。そこには、人間とはそもそも滑稽なものという抜き差しならぬ彼の哲学がある。俳句においても、その人間の「滑

稽」を詠んで楽しむ。渥美が俳句が好きだった理由は、どうやらそのあたりにあったのではないか、と思うのである。続いて三句。

天皇が好きで死んだバーちゃん字が読めず

梅酒すすめられて坊主ふふくそう

枝豆歯のない口で人の好いやつ

一句目、バーちゃんにとって、天皇様は絶対（...という滑稽）。余談ですが、渥美清に「拝啓天皇陛下様」という面白い映画あり。二句目、梅酒を出されて不満顔な僧侶（...という滑稽）。三句目、歯のない人の好いやつは寅さんこと、渥美自身か（...という滑稽）。

さあ、そこで、俳句は花鳥風詠。写生句であるべきと言われて久しい今。結果、ややもすれば、置き忘れられ主流からはずされがちな、俳句の本道？「俳諧味」そして「滑稽」。今、袋小路に入ってしまった俳句（巷間、そのように言われているが）から抜け出る可能性はありや否や。その方法論としての「俳諧味ある滑稽句」の本道への復権？が待望されている。渥美の人間観察句を読むとき、寅さん、あんたもそうかと、風天句に俳句の将来への大いなる望みを見つけるのである。さらに三句を引いてみる。

ヘアーにあわたててみるひるの銭湯

汗濡れし乳房覗かせ手渡すラムネ

赤とんぼじっとしたまま明日どうする

一句目、これは渥美が結核手術から生還したときの句。二句目、偶然目にした乳房に寅さん何を感じたか。そして、三句目、この句に注目したい。風天句は小さな生き物にも暖かな視線を送る。見逃せないのは、生き物を詠っていながら、人間を詠んでいることである。人間の滑稽さとそこに内包する哀感を詠んでいるのである。それこそ、俳句に欠かすことのできないものなのである。滑稽句に欠かせないこのペーススについては、のちの機会に譲ろうと思う。